

Шостакович



Симфония №12 "1917-й год"



京都フィロムジカ管弦楽団

第36回定期演奏会 2015年1月18日



京都芸術センター
制作支援事業

KYOTO ART CENTER
京都 芸術 センター

主催：京都フィロムジカ管弦楽団

後援：滋賀県・滋賀県教育委員会、大津市・大津市教育委員会

ABCびわ湖放送、京都新聞、読売新聞大津支局

毎日新聞大津支局、産経新聞社、朝日新聞大津総局



文化で滋賀を元気に！



お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

●携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。

●演奏中の私語は固くお断りいたします。

●客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。

●補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。

●「せきチケット」にご協力下さい。咳、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。

なお、演奏中の「のど飴」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。

●演奏者が音を出していなくとも音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

●演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。特に、最後に演奏するショスタコーヴィチ作曲『交響曲第12番』は、約40分間、すべての楽章が切れ目なく続けて演奏されます。ご注意ください。

京都芸術センター制作支援事業

京都フィロムジカ管弦楽団 第36回定期演奏会

2015年1月18日(日) 14時開演

滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール(大ホール)

13:15～ ロビーコンサート

☞ Program ☝

ヨハネス・ Brahms (1833-1897) / 悲劇的序曲 作品81

Johannes BRAHMS : Tragische Ouvertüre Op.81

エドワード・エルガー (1857-1934) / 演奏会用序曲『コケイン』作品40

Sir Edward William ELGAR : "Cockaigne (In London Town)" Concert-Overture Op.40

— 休憩 —

ドミトリー・ショスタコーヴィチ (1906-1975) / 交響曲第12番ニ短調『1917年』作品112

Дмитрий Шостакович : Симфония № 12 ре минор "1917 -й год" соч.112

I . Революционный Петроград 「革命のペトログラード」 — II . Разлив 「ラズリフ」

— III . Аврора 「アフローラ」 — IV . Заря Человечества 「人類の茜雲」

※全4楽章が切れ目なく続けて演奏されます

指揮 滝本 秀信

☞ロビーコンサート☞

13:15より

マルティヌー／ノネット

Vn:高原 Va:渡邊 Vc:多田 Cb:藤井 Fl:鳥山 Ob:大王 Cl:関 Fg:石塚 Hr:渡辺

…チェコ人の作曲家マルティヌー、最後の作品の9重奏。彼の祖国色がする3楽章構成の作品から、今回は第1楽章を演奏します。(藤井)

アイヴズ／『答のない質問』

Vn:ハ木、高原 Va:渡邊 Vc:多田 Cb:藤井 Fl:山口、間嶋、高松、鳥山 Tp:遠藤

…アメリカの作曲家アイヴズは、美しい旋律たちの意表を突いた組み合わせによって独創的な音楽を作りました。この曲は題名の通り、自問自答を永遠に繰り返すような哲学的な作品です。(遠藤)

シンプソン／4本のトランペットのためのソナチネ

Tp:北山、遠藤、東澤、芳屋

…シンプソンは今世紀のアメリカの作曲家で、この曲は明快な1・3楽章とゆったりした2楽章からなり、トランペットアンサンブルの定番曲として有名な作品です。(北山)

指揮者

滝本 秀信 (たきもと ひでのぶ)

指揮法を汐澤安彦・伊吹新一、編曲・和声学を橋田勝之扶の各氏に師事。国外においてオーケストラ指揮の研鑽を積み、クルト・レーデル（イタリア・レスピーギ音楽院）、リヒアルト・エデリンガー（ウィーン国立音楽大学）、アレクサンドル・ヴェデルニコフ、レオニード・ニコラエフ、イーゴル・シュテッガマン（モスクワ国立音楽院）、アレキサンドル・カントロフ（サンクトペテルブルク・バレエ・



シアター）各氏に師事。ロシアへは度々渡り、リムスキイ=コルサコフ作曲『交響組曲シェヘラザード』チャイコフスキー作曲『交響曲第5番』他を次々に指揮しプロデビューを果たす。その後、サンクトペテルブルク・バレエ・シアター『白鳥の湖』全幕公演他でのバレエ指揮、『ナタリー・ショケット・オペラ・コンサート』、京都市交響楽団・大友直人指揮フォーレ作曲『レクイエム』、ベートーベン作曲『交響曲第9番』他の合唱指揮、ブルガリア共和国・チェコ共和国での客演指揮等、幅広く活動を続ける。2013年ブルガリアを再訪、パザルジック・フィルハーモニック・オーケストラと共に真摯なリハーサルを展開し、熱く感動的な演奏を届け全客席スタンディングオーバーションによる絶賛を受けた。

国内においても北陸中部近畿中国各地を精力的に訪れ、高校吹奏楽部や大学・市民オーケストラの定期演奏会を数多く客演指揮、学校現場での指導や各研究会・関係音楽学院との交流、音楽ゼミナー講師、審査員等、意欲的に活動を続けている。

これまでに、ロシア国立サンクトペテルブルク・シンフォニー・オーケストラ“クラシカ”、同市バレエ・シアター・オーケストラ、ブルガリア国立プラツァ・フィルハーモニー・オーケストラ、同国パザルジック・フィルハーモニック・オーケストラ、チェコ共和国西ボヘミア交響楽団、京都フィロムジカ管弦楽団、墨染交響楽団、ウイングフィルハーモニー管弦楽団、堺フィルハーモニー交響楽団、あじさい管弦楽団、名古屋工業大学管弦楽団、福井大学交響楽団、大阪市立大学交響楽団、龍谷大学交響楽団、京響市民合唱団、合唱団コールピーポー、阪急百貨店吹奏楽団、洗足学園ウインドオーケストラ他、数多くの管弦楽団・吹奏楽団・合唱団の指揮をする。

「フィロムジカ管弦楽団とは4度目の公演であり、第1回定期演奏会から着実に成長を続けているこの熱き仲間たちとの再会を喜び合うと共に、偉大なる作曲家たちの今回の名曲を、心をこめて演奏したい！」と抱負を語る。

印刷のことなら

大地社

〒602-0858
京都市上京区河原町荒神口上ル二筋目東入ル
TEL (075) 231-1727 (代)
FAX (075) 256-4604

曲目解説

Tp. : 遠藤 啓輔

ブラームス／悲劇的序曲

第2交響曲やヴァイオリン協奏曲といった名作を発表した直後の、1880年に作曲された作品である。大学から名誉博士号を授与されたのを機に作った『大学祝典序曲』と並行して作曲されたといわれる。チューバやピッコロを含むブラームスとしては比較的大きな編成は両序曲とも似ているが、楽しげな『大学祝典序曲』に対し、この『悲劇的序曲』はその名の通り、暗さを湛えた音楽がブラームスならではの情熱をもって冷たく燃え上がるのが魅力である。湧きあがる楽想を性格が正反対の2作品に振り分けて作曲する、ということはよくあるそうだが、この『悲劇的序曲』にはさらに、近しい人の死といった個人的思いが反映されているとも言われる。曲中に頻出するトロンボーンとチューバによる四重奏は鎮魂の音楽だろうか。また、この曲には要所に空虚5度（長調か短調かを決める音を欠いた和音で、ベートーベン第9の冒頭が有名）の和音が要所に用いられ、長調でも短調でもないうつろな響きが、喪失感を一層強くしている。

エルガー／演奏会用序曲『コケイン』（ロンドンの町にて）

イギリス音楽の再生のきっかけを作ったとされる国民的作曲家・エルガーが1901年に作曲した作品である。標題の『コケイン Cockaigne』とは、本来の意味は、そこにはケーキでできた建物があるなどとされる空想上の楽園である。これがいつしか、コックニー（ロンドンっ子）たちが住むところ、という意味でロンドンを指す言葉になった。コックニーCockneyとは、本来の意味は「卵黄の無いできそこないの卵」ということだが、転じて意気地のない軟弱な都会人を指すようになった。そして、ロンドン中心地の東側に広がるイースト・エンドとよばれる工業地帯で一生を終える、独特の訛りで話す貧しい人たちをコックニーと呼ぶようになった。この曲の作曲当時、エルガーは、『エニグマ（謎）変奏曲』の大成功で名声を得ていたものの、大曲『ゲロンティアスの夢』の興行失敗で貧窮にあえいでいた。エルガーはロンドン出身ではないが、貧しくも自らの生き方を守るコックニーたちに親近感を抱いたのかもしれない。この曲は「健康的でユーモラスな作品」と評され、オーケストラの瑞々しい音色と、時折襲ってくる「愁いを帶びた金管の叫び」のコントラストを楽しむことができるエルガーらしい小品である。その一方で、鈴などの打楽器がにぎやかにきらめく中、太陽の輝きのように強烈に明るい音楽が挿入されて異彩を放つ。まるでイタリアの作曲家レスピーギのようだ。南国的なこの箇所は、想像の世界の桃源郷を描いているのだろうか。また、時折小さく聞こえてくる吹奏楽風の音楽は、すぐ隣の中心街を行進する軍楽隊を遠くから聞いているようである。曲の最後は大聖堂のオルガンのような壮麗な響きになる。オルガンを弾いていたエルガーの本領発揮といったところだろう。コックニーたちが住むところではメリラボーン Marylebone教会の鐘が聞こえるという。この響きもメリラボーン教会の中で鳴り響くオルガンなのかもしれない。

ショスタコーヴィチ／交響曲第12番ニ短調『1917年』

●12番の独特的評価

フィロムジカ創立当初からのメンバーは僕一人になってしまったから、創立（1996年）直後の早い時期に、この12番が候補曲に上がるも実現しなかったことを知る者は誰もいないだろう。当時も今回も僕は推薦者ではないから、今回の12番の演奏は「十数年間の思いが実現した！」といった類のものでは全くない。しかしながら、十数年の時を隔て、メンバーがほとんど入れ替わっても、フィロムジカの琴線に触れる何かが12番はある、と言えよう。ショスタコーヴィチ15曲の交響曲の中でも12番はやや独特的評価がなされる。それは概してマイナス・イメージで語られる。音楽事典やショスタコーヴィチに造詣の深い執筆者による著作においてさえ、「記念碑的駄作」「彼の15曲の交響曲の中で最も才気に乏しい作品」「体制に迎合した駄作」といった散々な評価がさも断定的に書かれているのだ。

実際、ショスタコーヴィチを愛好する僕自身、12番はそれほど偏愛するナンバーではない。僕がショスタコーヴィチを愛好する理由は、深刻な厭世観と気楽で卑俗な旋律、グロテスクで重く暗い響きと馬鹿馬鹿しいほど明るい雰囲気、といったまるで矛盾した膨大な音楽要素たちが、危うくも破綻することなく一つの作品としてまとまるという途方もなさがあるからだ（それゆえ、僕は4番を熱愛し、14番を最も評価する）。こうした観点からすると、12番はあまりにも音楽として整いすぎているように思われて物足りなさを感じたのだ。しかしながら実際にこの曲に取り組んでみると、優等生的均整美というこの弱点こそ、実は12番独特の魅力では？と感じるようになってきた。ショスタコーヴィチは作品を書く際に自身に課題を与えて作曲していた可能性がある。第2交響曲はポリフォニーを極めることを課題にしていたと考えられるし、また私見では、第8交響曲はマーラー風の交響曲を書こうと取り組んだように感じられる。そしてこの12番は、古典的交響曲を書こうと自らに課した作品と言えよう。とりわけ、古典交響曲的4楽章形式を取りながらも全楽章が一続きになっているという個性やニ短調という調性から、シューマンの傑作『交響曲第4番』との共通性が色濃い（注1）。この12番は、古典の無駄のない引き締まった交響曲を志向しながらも、ショスタコーヴィチ独特の途方もない個性が端々から滲み出るという、比類のない作品と評価することができよう。

もっとも、12番への低評価の背景には、『1917年』という標題が示す如く「体制に迎合した」作品である、というレッテルがあるようだ。“ソヴィエトが生んだ国民的作曲家”であるショスタコーヴィチは、生前は「ソヴィエトでは芸術家が大衆に奉仕することが求められるが、彼ほどそのことに忠実であった作曲家は少ない」など、政府から度重なる批判を受けつつもその批判を誠実に受け止めた、ソヴィエト政権にとって模範的な作曲家と見做されてきた。しかしその死後、体制を風刺した未発表の作品（『反形式主義的ラヨーク』）が見つかるなど、体制に忠実な表の顔と、体制に批判的な本心とを、したたかに使い分けてきたことが分かってきた。12番は、ロシア革命を牽引したレーニン（表紙のシルエット参照）を讃え、記念すべき革命の年である「1917年」を標題に冠したとアナウンスされる作品で、それゆえ、体制に迎合する表の顔で書いた妥協作、と評価されるのであろう。しかし、果たして12番は妥協作にすぎないのか？ 検証してみたい。

● 「1917年」から作曲に至るまでの歴史

まずそもそも、「1917年」に何があったか、そして、12番が作曲された1961年までにどう推移したか、振り返ってみたい（注2）。もっとも、僕にとってロシア史は専門外なので、以下で概説する内容には誤解や偏見があるであろうことを予めお断りしておく。

1914年に始まった第1次世界大戦への参戦で、ロシア帝国の経済は破綻、首都ペトログラード（現在のサンクトペテルブルク）では労働者の解雇がなされる一方、政府や議会は機能せず、民衆の不満が高まっていた。1917年の2月（ロシア暦。以下同じ）、デモ隊に軍が発砲する事件が起きるが、自国民を撃ったことに対する悔恨から兵士の反乱が起き、ペトログラードは混乱に陥る。1905年の「血の日曜日事件」（ショスタコーヴィチはこの事件を描いたとされる交響曲第11番を作曲している）で大勢の市民を殺害して以降、民衆の支持を失っていた皇帝ニコライ2世はやむなく退位し、王朝が終焉した（二月革命）。「二月革命」後は、帝政時代の議会を母体とする「臨時政府」と、革命家による「ソヴィエト」（評議会といった意味のロシア語）が並立する二重権力状態になっていた。また、戦争への忌避感が高まり、脱走兵が急増した。こうした中、国外亡命中の身でありながら第1次世界大戦反対の立場を表明した革命家レーニンが人々の賛同を集め始めた。さらにレーニンが所属するボリシェヴィキ（「社会民主労働党」の中の一派）が軍内部で起きたクーデターの鎮圧に助力し、影響力を強めた。レーニンはボリシェヴィキ単独の権力の確立を目指して潜伏先からひそかに帰国し、武装蜂起を計画する。そして10月、ボリシェヴィキが武装蜂起の計画を実行に移し、巡洋艦アフローラ（オーロラ）号とペトロハバロフスク要塞から砲撃がなされる。アフローラ号が放ったのは1発の空砲だけで、ペトロハバロフスク要塞からも数発の砲弾が不正確に放たれただけだった。それでも臨時政府の兵士たちは無抵抗のまま逃散。「冬宮」と呼ばれる宮殿にいた臨時政府の閣僚は逮捕された。同時に開かれた全ロシア・ソヴィエト会議は、ボリシェヴィキによる新しい政府「人民委員会議」（レーニンが議長）の創設を認めた（「十月革命」）。この翌月、憲法制定会議の選

挙をおこなうが、ボリシェヴィキは多数派獲得に失敗、レーニンは同会議を解散し、早くも一党独裁の道を歩み始めた。1918年に第1次世界大戦は終結したものの、国内諸民族の独立戦争や外国軍による干渉戦争（日本のシベリア出兵など）が起きた。レーニンらは戦争状態にあることを理由にして強権を振る。恐怖政治によって農村から強制的に食料を簒奪し、反対派の知識人を国外に追放した。1924年にレーニンが死ぬと、権力を握ったスターリンは国民の圧倒的多数である農民を犠牲にして工業化・軍事化を強硬に推し進め、国内は飢餓状態にあるのにもかかわらず外貨獲得のために小麦を輸出した。こうした強引な政治は当然さまざまな軋轢をひきおこすが、スターリンは肅清による恐怖政治によって権力を維持し、自らの失政の責任は現場担当者に押し付け処刑した。密告が奨励され、相互監視態勢が敷かれ、拷問が日常的におこなわれたという。スターリン統治下において、ともに数百万といわれる餓死者と刑死者が出たとされる。革命家であるはずのスターリンは、むしろロシア皇帝の専制をモデルに統治をおこなっていたらしい。スターリン率いるソヴィエト連邦は第2次世界大戦に勝利するが、敗戦国よりも深刻な二千七百万人もの犠牲者を出しての勝利であった。とりわけ、ショスタコーヴィチも当事者であった「レニングラード包囲戦」では二百万人以上が飢餓などで死亡したとされる。また、猜疑心が強くスペイを警戒するスターリンは、戦争終結後からユダヤ人を極度に警戒するようになり、そのためソヴィエト社会にユダヤ人排斥の動きが現れた。1953年にスターリンが死ぬと、フルシチョフが権力闘争に勝利。1956年、フルシチョフはスターリンの失政や恐怖政治を批判した。これによりソ連社会に『雪どけ』とも呼ばれる一時的な緊張緩和の雰囲気が生まれた。これが1917年から12番作曲（1961年）までの時代のあらましである。

●12番に隠されたメッセージとは？

僕はまず、レーニンを讃えることが「体制への迎合」とする考え方にはそもそも疑問を感じる。ショスタコーヴィチは生涯にレーニンによる革命を讃えた曲を3曲（交響曲第2番・12番、交響詩『十月』）書いたほか、ことあるごとに「レーニン交響曲」を計画中だという発言をしていたが（注3）、いずれもレーニンの死後のことだ。現体制ではなく建国の英雄を讃えるということは、「昔に比べて今は…」という現状批判と読み取ることも可能だ。旧ソヴィエト時代と同様の一党独裁体制が続く中華人民共和国においては今日でも、建国の英雄・毛沢東を讃える運動があると「現体制への批判がこもっているのでは？」と勘織られる。この当時においてレーニンを讃美することにも似たような意味合いがあったのでは？と感じる。建国の英雄の讃美は、体制に従順な仮面をかぶっての絶妙な体制批判だったのではないだろうか。ショスタコーヴィチは一方で現役の指導者スターリンをあからさまに讃美した『森の歌』を書いているが、これは（規模的に交響曲と呼んでも遜色ないのにもかかわらず）「交響曲」とは題されていない。少なくともショスタコーヴィチが「交響曲」と題したものの中に「体制に迎合した駄作」は無い、というのが僕の考えだ。

さらに20世紀末ごろから、12番の中にスターリンを告発する暗号が秘められている、とする説が出てきた。一柳富美子氏によるこの説は以下のようなものだ。一柳氏は、ショスタコーヴィチをライフワークとする指揮者井上道義氏から、12番の中に音楽の流れを邪魔するモチーフがあり怪しい、と相談を受ける。これは「ミュー・シード」という3つの音（表紙参照）で、1楽章で弦のピッティカートによって唐突にしかし控えめに登場し、2楽章では「レ♯ーラ♯ーシ♯」の記譜（実際に鳴る音は同じ）で登場、3楽章では姿を消すが、終楽章で再び「ミュー・シード」の形に戻って盛大に鳴らされ、最後は主役の座を奪ってしまう、というものである。一柳氏はこの音列をヨーシフ・ヴィッサリオノヴィチ・スターリン Иосиф(Ёсипとも書く) Виссарионович Сталин のイニシャル「E.B.C.」を、字形が酷似するドイツ語「Es(ミュー)-B(シード)-C(ド)」で表現したものと判断。スターリンの罪業を告発しようとするも（第1楽章）、その声を発することは徐々にかなわなくなり（第2・3楽章）、第4楽章では逆にスターリンが独裁者として君臨する（あるいは終楽章を、スターリン批判を描いた楽章とする解釈も可能）、というものである（注4）。一柳氏の説は音楽的疑問が出発点にあるだけに説得力がある。

僕は、この「EsBC=スターリン」説を首肯したうえで、標題や楽曲を仔細に吟味すると、また別の“裏ストーリー”とでも言うべきものが浮き上がってくるのではないかと気付いた。所詮は素人の思いつきにすぎない。が、音楽は聴衆があつて初めて成立する。聴衆としての僕の思考にも意味があるので、ここで披露したい。

12番は各楽章に副題が付けられている。第1楽章は『革命のペトログラード』。第2楽章の『ラズリフ』は「レーニンが潜伏し革命の構想を練った湖」と説明されるので、現サンクトペテルブルクの郊外にあるセストロレツキーラズリフ湖（現在、「サンクトペテルブルク歴史地区と関連建造物群」の一部として世界遺産になっている）のことであろう。第3楽章『アフローラ』は十月革命を象徴するアイコンとなった巡洋艦アフローラ号とされる。そして第4楽章`Заря Человечества`は、解説書では『人類の夜明け』と訳される。僕は語学が全くできないので辞書に頼るしか無いのだが、辞書を引くと意外に面白い情報に出会える。ラズリフ `Разлив` には「雪どけによる（川の）氾濫」や「光などが広がること」という意味があるらしい。そして、アフローラ `Аврора` はギリシャ神話の曙の女神・エオスのことで、そこから「あけぼの」「朝焼け」という意味が出てきたそうだ。仮に第3楽章の標題が『あけぼの』だとすると、続く第4楽章が『夜明け』では同じ意味の連続になってしまう。`Заря` の語は空が赤くなる現象を指す語で、一般には朝焼けを指すが、夕焼けを指すこともあるという。そうすると、第3楽章は『あけぼの』、第4楽章は『人類のたそがれ』（注5）と考えた方が時間の流れがしっくりする。

これに加えて、この曲には「神」の存在が関わっているような気がしてならない。12番の第2楽章にはトロンボーン・ソロがあるが、ショスタコーヴィチにしては珍しい、「神の声」の代弁者としてのトロンボーン本来の厳肅なソロなのだ。ショスタコーヴィチはトロンボーンを大胆に使った作曲家だが、3番・4番などで大活躍するトロンボーンはいずれも「神」を茶化したかのような卑俗で馬鹿馬鹿しいソロだ（だからこそ他に類を見ない魅力があるのだが）。これに対して12番のソロは至って真面目に「神の声」として使われている。また、ホルンで提示される第4楽章冒頭の雄渾な主題は、『怒りの日』の音楽の変形とする見解がある（注6）。『怒りの日』はグレゴリオ聖歌の一つで、「世界が灰燼（かいじん）に帰す日」「審判があらわれてすべてが厳しく裁かれるとき」と“最後の審判”的情景を歌いあげる。そして12番の最後は、ニ長調の和音が伸ばされて閉じられる。ニ長調（D-dur）の根音レ（D）はDeus（神）の頭文字と同じであるため、信仰告白的な和音と言える。そしてこのニ長調の和音に重ねて、ドミトリー・ショスタコーヴィチDmitri SchostakowitschのイニシャルであるD（レ）とS（=Es ミ♭）がトリルで鳴らされる（注7）。

以上から下記のような“裏ストーリー”ともいいくべきものが見えてくるのではないだろうか。

第1楽章『革命のペトログラード』ではロシア革命からその後のソヴィエト社会の歩み全体を描いており、その中で、イニシャルで表現されるスターリンが不気味な存在感を放つ。第2楽章では、そのスターリンのイニシャルは同音異名表記されて、譜面上は姿を消す。これは“スターリンの死”ではなかろうか。抑圧されたスターリン時代から、『雪どけ』とよばれる緊張緩和の時代が訪れ、光に溢れた広い地平が広がったかに見える（『ラズリフ』の語感にふさわしい）。トロンボーンの莊重な神の声が静かにスターリンを断罪する。第3楽章ではスターリンのイニシャルは完全に消えうせる。非情な独裁者が排除された新しい時代が夜明け（『アフローラ』）を迎えたかに思われる。第4楽章冒頭で、スターリンを審判せんとするように『怒りの日』の旋律が降ってくる。しかしあうことか、楽章中盤以降、スターリン音型の伴奏にエスコートされて、『怒りの日』の旋律は軽やかに踊り出すのだ。神に裁かれる被告として復活したはずのスターリンの亡靈が、逆に神を手玉に取ったのか。スターリン音型は第1楽章よりも強大な姿になって、音楽を支配してしまう。第2のスターリンともいいくべき次なる強大な権力の登場で、一瞬夢見た人類の幸福の時代は再び暗闇に沈んでいく。曲の最後では、新たな強権支配者（スターリンのイニシャル）に対して、神（ニ長調の和音）とショスタコーヴィチ（ショスタコーヴィチのイニシャル）が対峙するが、ただ単に“対峙した”だけであり、救われたという充足感が無いまま終わってしまう。

つまりショスタコーヴィチは、『雪どけ』と呼ばれる解放の雰囲気を喜ぶ人々に対して、“すぐに第2第3のスターリンが出てくるぞ”、という警鐘を発したのではないだろうか。実際、ショスタコーヴィチはスターリンの死に対して「安堵感を漂わせてはいたが幸福感に浸ってはいなかった」という（注8）。そして次の交響曲第13番『バビ・ヤール』で、ソヴィエトにおけるユダヤ人排斥の動きに正面から抗議したショスタコーヴィチは、再び政府からの強い圧力に苦しむことになるのである。『1917年』という標題は、単に革命があった1年間だけを描いたのではなく、1917年から現在（1961年）そして未来をも見通した作品、という意味ではなかろうか。

なお、「神」についてもう少し掘り下げるに、ボリシェヴィキがもともと無神論的思考を持っていたこともあって、ソヴィエト当局は革命当初から教会勢力と敵対関係にあった。当局はことあるごとに教会資産を没収する一方、ロシア正教会はボリシェヴィキを破門するなど対立したほか、スターリン時代には教会の鐘を溶解して資材にし、教会を閉鎖して集団農場の倉庫にすることもあった。戦争中は教会に対して融和策が取られたが、これは教会を通して人々に戦争協力をさせることが目的であり、依然として政府は教会を厳しく管理した（注9）。また、ショスタコーヴィチ自身も無信仰で神を信じていなかったとされている（注10）。12番には、宗教的素材が現れるが、神によって救われた、という充足感は得られず、神を信頼しているのかいないのかどっちつかずの印象を受ける。ソヴィエト社会とキリスト教との不幸な関係、あるいは作曲者と宗教との微妙な関係をも反映した、迷いに満ちているようで、それゆえ、聴き手を惑わし続けるのかもしれない。そしてそれがまた独特な魅力だ。

●楽曲について

ショスタコーヴィチ自身は「音楽は逐語的にある主題に結び付けられることは絶対にない」と述べており（注11）、標題と無関係に音楽を楽しむことは間違いでなく、むしろ作曲者はそのような聴かれ方をこそ望んでいたかもしれない。ソヴィエト当局から「人民に理解しやすい音楽を」という圧力を受けていたので、無理矢理ストーリー性をもった標題をつけて発表した可能性もある。しかし、前述のようにこの曲には様々なメッセージが込められている可能性も充分にある。以下では各楽章の魅力を、様々な可能性を探りながら紹介していきたい。

第1楽章『革命のペトログラード』は、低弦の悲痛で重々しい序奏で始まり、徐々に楽器を増やしてフル・オーケストラによる悲劇の頂点をつくる。標題に従えば、帝政ロシア末期の悲惨で重苦しい空気を表現していると言えよう。“暗黒の主題”と呼んで良いかもしれない。打楽器の激烈な強打で場面転換すると、一転して軍靴や騎兵が疾走するような恐ろしく速く不気味な音楽になる。小太鼓の連打は機銃掃射のようだ。“戦争の主題”だろうか。こうした重苦しい楽章の中に、おおらかで温かい音楽が挿入されて救われた気持ちになる。最初低弦だけで静かに示されたこの旋律は徐々に拡大して雄大なフル・オーケストラの音楽になる。冒頭の“暗黒の主題”とはネガとポジの関係にあるといえよう。あるいは二月革命を象徴する主題だろうか。二月革命（ロシア暦の2月は現在我々が使っているグレゴリオ暦では3月に相当する）は、暖かい日和に実施された国際婦人デモが自然発的に拡大して起きたものだとされるが、そうした雰囲気を湛えた旋律だ。“民衆の主題”と呼んで良いかもしれない。音楽はこの“民衆の主題”に“戦争の主題”が襲いかかるようにして展開し、最後は“暗黒の主題”が悲痛に再現され、死までの時を無慈悲に刻む時計のように打楽器が鳴る。表向きの標題に従えば、デモ隊が武力鎮圧された悲劇を示しているということになろうか。しかし、その背後では弦のピツツィカートによるスターリンのイニシャルが不気味な存在感を放っている。僕には、1917年年の革命だけでなく、レーニンの死後スターリンが権力を篡奪して以降の暗黒時代までも表現しているように思われる。

第2楽章『ラズリフ』は、ゆったりとしたアダージョ。呻くような低弦の伴奏の上で、ホルンなどの管楽器が悲しげに歌う。重苦しい音楽が続く中、雲間から光が差してくるようにフルートの明るい音が降りてくる。これは第3楽章の主要主題の先取りである。これを受け、ファゴットが静かながらも決然としたソロを吹き上げる（ショスタコーヴィチの9番を彷彿とさせる）。表向きの標題に従えば、セストロレツキーラズリフ湖の湖畔に潜伏中のレーニンが、（第3楽章で描かれる）十月革命の武装蜂起の着想を得て実行を決断した場面と説明できよう。楽章終盤はこの交響曲の白眉ともいいくべき長大なトロンボーン・ソロとなる。ソロの締めくくりになって2番以下のトロンボーン・チューバが加わるという形態は、マーラーの第3交響曲第1楽章にそっくりだ。マーラーはショスタコーヴィチが最も影響を受けた作曲家であり、明らかにマーラーへのオマージュであろう。同時にこのマーラー3番第1楽章は自然讃美の音楽である。ショスタコーヴィチがこの楽章で本当に描きたかったのは、マーラーと同様、自然の美しさだったのかも知れない。この楽章の最後では、「死」を象徴する楽器である銅鑼のかすかな音とともに、スターリンのイニシャルが同音異名表記されて登場する。僕にはこれが、スターリンの死を表しているように思われる。この楽章は「ラズリフ」という言葉の通り、スターリンの死によって訪れた『雪どけ』によって、広大で光に満ちた未来が広がった（かに見えた）情景ではないだろうか。

第3楽章『アフローラ』は、前楽章でフルートによって示された主題が、慌ただしく繰り返される。弦のピツツィカートを主体にして転がっていくような冒頭は、チャイコフスキイ4番のピツツィカート・オステイナートを彷彿とさせる。途中、巨大な太陽がゆっくりと昇り、木管の閃光が差してくるような劇的な音楽が挿入される。「あけぼの」という意味での「アフローラ」の標題に相応しい。僕にはこれが、スターリンの死によって得られた（一時的な）光明のように思われる。しかしこの壮大な夜明けの光景の背後には、銅鑼による不気味な死の影が横たわっているのである。楽章後半は、主題がフル・オーケストラの大音響で再現される。表向きの標題に従えば、巡洋艦アフローラ号の砲撃で始まった十月革命の武装蜂起を描いているということになろう。

第4楽章は前述のように、必ずしも「夜明け」の訳が正しいとは限らない。ここでは、朝焼けとも夕焼けとも取れるように『人類の茜雲（あかねぐも）』と訳しておくが、もっと適切な訳語が見つかることを期待したい。冒頭はホルンのユニゾンによる雄渾な主題である。前述のように、この主題は『怒りの日』の変形とも考えられる。また、ここでは「強・強・弱」とステップを踏むサラバンド風の伴奏を伴う。ショスタコーヴィチはこのスペイン由来のリズムをしばしば使った。自分たちと同様に独裁者の圧政に苦しんでいたスペインの民衆に共感を覚えていたのではないか、と想像する。第2主題はワルツのような軽快な舞曲となる。表向きの標題に従えば、革命によって得られた人類の歓喜を示している、ということになろうか。この舞曲の旋律は第1楽章冒頭の“暗黒の主題”の旋律と融合していく。各楽章を切れ目なく続けて演奏しただけでなく、音楽内容的にも先行楽章を緊密に結びつけた見事な交響曲である。やがて舞曲の伴奏としてスターリン音型が軽やかに復活し、『怒りの日』の旋律が楽しげに踊り出す。第1楽章の主題も加わって最高潮の盛り上がりに達したところでティンパニの強打によって断ち切られ、作品冒頭の“暗黒の主題”が静かに戻ってくる。そしてコーダでは、1917年からの歴史を回顧するように、各楽章の主題の断片がフラッシュバックするが、常にその中心を支配するのは威圧的なスターリンのイニシャルだ。僕には、第2第3のスターリンの登場によって暗黒の時代に逆戻りすることを予見しているように思われる。最後は神聖なニ長調の和音と、無神論者ショスタコーヴィチのイニシャルとが、とつづけたように同時に鳴らされ、迷いを残したまま終わる。

注1：音楽愛好者仲間の浦野裕一郎氏からのご教示による。 **注2**：ニコラ・ヴェルト（遠藤ゆかり訳）知の再発見双書117『ロシア革命』創元社、2004／栗生沢猛夫『図説 ロシアの歴史』河出書房新社、2010／下斗米伸夫『図説 ソ連の歴史』河出書房新社、2011／横手慎二 中公新書『スターリン』中央公論新社、2014 などを参考文献とした。 **注3**：ローレル・E・ファーイ（藤岡啓介、佐々木千恵訳）叢書・20世紀の芸術と文学『ショスタコーヴィチ ある生涯』（改訂新版）アルファベータ、2005 p.155 **注4**：一柳（ひとつやなぎ）富美子『かくされたメッセージ（ショスタコーヴィチ/交響曲第12番）』井上道義指揮 京都市交響楽団 大阪シンフォニーホール公演当日配布資料。配布年月日失念、資料に日付記載なし、おそらく20世紀末ごろ **注5**：一柳氏も前掲資料で、「たそがれ」ともとれる、としている。 **注6**：工藤庸介 ヨーラシア選書4『ショスタコーヴィチ全作品解説』東洋書店、2006および、浦野裕一郎氏からのご教示。 **注7**：工藤前掲書 **注8**：ファーイ前掲書 p.232 **注9**：世界の教科書シリーズ『ロシアの歴史【下】』明石書店、2011 **注10**：ファーイ前掲書 p.325 **注11**：ファーイ前掲書 p.167

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様	西坂 寿美子様	高岡 拓也様
杉本 幸子様	辻 良治様	和田 之宏様
安藤 美知穂様	西 英子様	和田 慶子様
遠藤 時金様	竹野 繁也様	玉山 茂夫様
井谷 宏美様	河内 尚和様	石川 美保子様
鎌本 和弘様	森永 千一様	
谷口 佳隆様	西村 浩輔様	

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(1月現在)

京都フィロムジカ管弦楽団

Kyoto Philomusica Orchestra

Leaders	Violas	Double Basses	Clarinets	Trombones
馬渕 清香※ (Shostakovich,Brahms)	小坂 智子 渡邊 泰里	茂原 尚樹 田中 明江	関 英子 山本 拓	中村 三鈴 宮下 秀行
八木 愉希絵 (Elgar)	池側 将司・ 上田 秀樹・ 河井 奈美・	田中 郁太郎 鳥山 拓 藤井 輝之	山田 美保子・	前村 哲人・
Violins	久保 将哉・ 小幡 拓也 中居 楓子 森 亜紀 八木 愉希絵 安江 絵美子 渡辺 達之輔	清水 康映・ 菅澤 穂高・ 高原 友洋・ 古田 直道・ 吉川 昌毅・ ②後藤 志帆※	石坪 智美・ 猪股 佑介・ 亀谷 友紀・ 丸山 拓史・ ②岩尾 武司※ ②後藤 志帆※	石塚 有里子 大槻 萌絵 ②近藤 紀宏※ (Contrabassoon) ②桃川 大毅※
青木 麻須美・ 須田 謙史・ 高谷 祐介・ 堤 有里紗・ 谷内 優子・ 内藤 佐紀・ 中島 幸・ 西田 賢仁・ 藤井 まきは・ 安原 由克子・ 好村 墓・ 渡辺 隆寿・ 内田 佳子※ 崎里 みづほ※ 福澤 敬子※ 前川 信幸※ 馬渕 清香※	Cellos 多田 進 秦野 貴生 松浦 悟子 松浦 由香 奥田 悠・ 溝延 知・ 奥村 友梨香・ ②岡野 正義※ ②高畑 雅至※ ②高村 誠※	Flutes 高松 香陽子 鳥山 梢 間嶋 美波 (Piccolo) 御園生 香 (Piccolo) 山口 佳美	Horns 加藤 実可子 北山 絵里 山影 つぐみ 渡辺 悠 ②宇野 素子※ ②和田 純佳※	Bass Trombone 藤井 舞 Tuba ② 中塚 隆介※
	Oboes 梶原 めぐみ 木津 怜美 大王 恵里子 丸井 しづか	Trumpets 遠藤 啓輔 北山 武志 (Cornet)	Percussion 大浦 智紀※ 笠井 彰吾※ 木村 祐※ 新角 耕司※ 樋爪 謙一郎※	Timpani 糸井 渉※
				事務 西村 浩

弦トレーナー・客演コンサートミストレス

馬渕 清香

大阪府出身。桐朋学園大学卒業。小国英樹、原田幸一郎、工藤千博、森悠子、田辺良子、岩崎淑、R.ブレンゴラの各氏に師事。1990年全日本学生音楽コンクール第1位をはじめ、イタリア・シエナのギニアーナ音楽祭ギニアーナ・ディプロマ賞受賞、コンセールヴィヴィアン・オーディション最優秀賞受賞、イタリア・グッピオ国際Duoコンクール入選、東京国際芸術協会レ・スプレンデル音楽コンクール室内楽部門入賞など、国内外で多数の受賞歴がある。ソロ・リサイタルの開催のほか、オーケストラ、室内楽でも活躍。「DUO MOON STONES」「四次元三重奏団」メンバー。

弦トレーナー

岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC.マクベス、A.ハーゼス、M.アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♪第37回定期演奏会♪

2015年6月28日(日) 京都府長岡京記念文化会館

モーツアルト／歌劇『フィガロの結婚』序曲

ラフ／交響曲第2番 ※日本初演

スーク／交響曲第1番 ※日本初演

(予定)

♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか？まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。

＜募集パート＞

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス **（弦楽器急募！！）**

クラリネット・ホルン

【入団資格】練習に出席できること。年齢制限はありません。学生の参加も歓迎します。

【練習日時】毎週日曜日（午後1時～午後5時） 春と秋に練習合宿（大津市内。合宿費は10,000円程度）

【練習場所】京都芸術センターなど京都市内各所のほか、大津市など

【諸費用】活動費：3,000円/月 演奏会参加費：20,000～30,000円（学生・初参加の方には割引あり）

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail : recruit@kyotophilo.com

♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援してくださる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円

【期間】 ご入会いただいた月より1年間

- 【特典】
1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
 2. その他演奏活動のご案内
 3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123 (西村) E-mail : tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。